

FADO

26

Abril 2000

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

ポルトガルから帰って、食べた寿司が悪かったのか、大阪の水にあたったのか、体調を崩していたところに、留守中、横浜の斉藤氏あてに申し込まれたビデオの本数の余りの少なさに、勝手にちよいと落ち込んでしまった月田でした。6本だったら、赤字の出ついでとばかり、なかばやけっぱちで安いビデオデッキを買い、自宅でしこしこことダビングしたのだが、それが又、災いの元。何せ、2時間近くのコンサートのダビング作業。5日間、朝から晩まで見聞きしているうちに、自分の歌が嫌になってきた。表情さえも、いやになり、お前さん、何様と思ってるのさ、こんなビデオを人様に見せるわけにはいかないとまで思うようになる始末。ぶつぶついいながら、表紙カバーをコピーして、カッターナイフで切り揃え、折り曲げては、ケースにはめてゆく孤独な内職の末、目の前にダビングを終了したビデオが20本積み上がった。もうこれ以上一本たりとも作りたくない。一人愚痴る自分にも愛想が尽きた。

「学芸会だよ、君のコンサートは」その言葉がさらに拍車をかける様に、私を苛んでいる。「どのように聴く人に伝わっているのかわかっているのか」という友の問いに、「聴いた人に聞くしかないんじゃない」と答えた私に、プロとして失格のレッテルを貼られてしまった。規格外品必ずしも不良品とは限らないと開き直りつつも、今、私は、出口も見えない暗闇に閉じ込められている。こんなことを書くこと自体が自分に、そしてファンに甘えていることなのかもしれない。

北海道のファンクラブの面々が3月の北海道公演の準備の為、真冬の厳寒の地を走り回ってくれている。気を取り直し、背筋をしゃんと伸ばしてみる。

自分の為にはできなくても、愛する者の為には、人は頑張れるものなのですね。

(2000年2月10日 記)

2000年、ギンショにて

新しい年を迎えたギンショの海はやはり荒れていた。

波は激しく砕け、
浜に波の華を残しては
慌ただしく大海へ帰ってゆく。

ただいま!帰ってきたよ!



ギンショの浜で

テープレコーダーを持ち、「海だ海だ。ポルトガルの海だ」と叫びながら、雨の中、大西洋へ駆け出していった。あれは16年前のギンショの浜での出来事だった。初めて、ポルトガルの波の音聞き、幾重にも重なりながら崩れてゆく波を、その向こうにロカ岬を見た。あの日フェルナンダに出会い、以降、ポルトガルを訪れる度に彼女が必ず連れてきてくれるギンショの海だ。

あの時の様に、砂浜を駆け回る力は私にはもはやなく、
やおろ両手に砂を盛り、
指の間から、風にせかされるように、こぼれ落ちてゆく砂を見る。

出会った人達

別れた人達

もう二度とあえない人もいる。

私の心を震わせ続けていたのはこの海の風だったのかもしれない…
この吹き過ぎる風の一瞬の中にすべてがあったのかもしれない。

手の平の中には何も残らない。

走り去る馬のひづめの跡を波が消してゆく。

2000.1.10

ライブアルバムCD 月田秀子ファドコンサート '99 「オブリガダ、アマリア」



<収録曲>

涙・不如意・それぞれのファド・コインブラ・
吹きゆく風のバラード・置き去り・川辺の民・
さながら神の・どんな声で・難船・洗濯・
私の中のファド・歌に憑かれて・アマリア・
暗いしけ・友は遠く 全16曲。

予約申し込み
受付中!

*当CDは自主制作の為、レコード店には置いてません。
ご希望の方は、郵便振替にてお申し込みください。

- CD代金：3000円(消費税込み)
- 郵送手数料：400円(ファド倶楽部会員は不要)
- 口座番号：00990-6-18440
- 発送予定：4月下旬

月田秀子のポルトガル紀行 —2000年新春編 その1—

1月5日、30分遅れで、チューリッヒを発ったスイス航空694便は、夜11時にオレンジ色の街の灯が星の様にちりばめられたリスボンに着いた。ひげづからあふれんばかりの笑顔をたたえたレロが迎えに出てくれた。宿のレジデンシアル・ノヴァ・シルヴァにチェックインしてすぐ、カルロスがポルトガルギターを弾いている「アダガ・マシャード」へと向かった。20時間近い旅の後で、体は疲れているが、何よりも、1年前アマリアと会う最後の機会を作ってくれたお礼を言いたかった。「アダガ・マシャード」は、店を閉めたところ、奥のテーブルで出演者達が食事をしていた。ナブキンで口を拭きながら現れたカルロスは、相変わらずの男前だ。髪は少し薄くなったが、60に手が届くとは到底思えない精悍な面立ちに笑顔をたたえて迎えてくれた。年末のアマリアの追悼コンサートのプログラムを渡して、早々に引き上げた。

パイロ・アルトに来たからには、ファドの一曲も聞いて帰ろうと、「カフェルーズ」へと向かった。団体観光客が帰った後、「カフェルーズ」は、大広間の様なステージ空間から、間仕切り一枚で本来のファドの店へと変身する。

アマリアが1955年12月、ライブをした店だ。『カフェルーズのアマリア』と題したレコードにもなっている。アマリア35歳の時、彼女の「暗いはいしけ」の歌声が世界中を制覇しつつある時の事だ。その翌年1956年にはバリのオランピア劇場で歌い、大成功を収めるといふ、アマリア絶頂期のころであった。

相変わらずプロフェッサー・エドガー・ノゲイラがポルトガルギターを弾いていた。12年前、突然、テレビに出演する事になった時、伴奏をしてくれたのが彼と、レロだった。「カブラオン通り」を教えてくれたのは彼だった。その夏の「ファド大祭典」で歌った時もバックを努めてくれた。その「ファド大祭典」にまた出演しないかと誘ってくれた。3人の男性歌手のファドを聞いて、最後の客となった私たちは店を後にした。

宿に着いたのは2時を回っていた。4時ぐらいにやっと眠りにつき、目が覚めたのは6時。その日、ギターの圭ちゃんたちをどこへ案内しようかと考え出すと、もはや眠れなかった。

1月6日、朝食を取りながら、今日はアルファマを散策しようという事になり、まずは両替。1エスクードが約0.6円。年未来の円高はかるうじて続いている様だ。両替所の向かいのレコード店「アマリア」で横山氏と落ち合うことになっていた。彼は、年末から、ポルトで過ごし、2日程前に、リスボンに来ていた。ファドに関しては、私なんかよりずーと精通しているし、ポルトガルギターも弾く。確か同じ年だったように記憶している。お互い独身だが、二人の間を取り持っているのは、ファドへの限りない恋慕。彼は、ファドを何とか理論的に解明しようとしているし、私は、ファドへの一方的な思いに身を預けているとも言おうか。東京在住の彼とは、日本にいても、コンサートの時に会うくらいだから年に2度程しか会うことはない。

「アマリア」の社長のマヌエルじいさんは、「奇跡だ。昨日ビデオの噂をしていたとこだよ。」と、目を潤ませての歓迎ぶり。私を含め

総勢5名を、行きつけのカフェに連れて行ってくれた。コーヒーと「パスタイス・デ・ナタ」（いわゆるエッグ・タルトの元祖）をほおぼる彼らを横目に、生ビールと鱈のコロッケを注文。ちよいとアルコールを入れると街を歩くのがぐっと楽しくなる。

「サンタルジア展望台」で市電を降り、サンジョルジュ城へ向かう。「ぼくは、観光客に徹する」と公言したとおり、圭ちゃんは、8ミリデッキと一体になり、ちよっと目を離すと細い路地裏に行方知れずになる。補修を終えたサン・ジョルジュ城は、きれいになり過ぎて、あの朽ちかけた城壁の風情が好きだった私には、何とも面白くない。



サンフランシスコ坂にて

“かわりゆくファドの店”

その夜は、ポルトガルロック界の旗手「ルイ・ヴェロゾ」に招かれている横山氏にくっついて私は、アルファマの大聖堂の近くにある「ジョアン・ダ・ブラサ・クループ・ド・ファド」というファドレストランに行った。マカオでポルトガルギターを弾いてくれたマリオ・ベシエコの店だ。古い修道院を改装した様なアーチ型の高い天井、百人は入れそうな大きな店だ。バーでビールを飲んでいて私に取材の矛先が向いてきた。テーブルに着くと、マルガリーダ・ベッサが向かいに座っている。「孤独な女の独り言」は彼女の歌だ。カルロス・ゼルが私を見つけ、あの怪力でぐっと抱き締めるや、耳元でささやいた。「愛しいビデオ、あとで歌ってくれるよね。」12年前、テレビの番組で一緒した時からの友人だ。「初めて君に会った時、残念ながら、俺は結婚しちゃった。それでも俺はあんたにぞっこんさ」とポルトガル人特有の真面目な面持ちで口説き続けるファドイスタだ。年齢不詳、でも、ファド美術館の古い写真の中に彼の姿があったから、私よりずーと年上に違いない。ジョゼ・ダ・カマラも愛想のいい笑顔で挨拶に来た。旧知の人たちに会えるのは嬉しかったが、歌わなければならない羽目になってゆくを感じながら、固めの鴨の炊き込みご飯を、ポルトガルでは上等と思われる赤ワインで流し込んだ。招待されているのは、ほとんど相当なファドの歌い手だった。彼らが次々と歌ってゆく。とうとうカルロスの響く声が、私を紹介した。こうなったら深く歌うしかない。夕べはほとんど寝てないし、声の出る筈がない。あとは、心で歌うしかない。「アマリア、聞いてね」そう心で呟いて、歌い始めた。「不如意」「涙」ともう一曲は何を歌ったか覚えていない。

陽気なギタリストのジョアン・ヴェイガが来店したのは、2時も回ったころだった。彼の人間臭さが私は大好きだ。彼の飛ばす野次には、愛情がこもっている。美辞麗句の中に刺があるのと対照的だ。その晩初めて、彼が歌うのを聞いたが、どのプロの歌手よりも私の心を打った。どうしようもない心のほとばしりに自ら手を焼きながら、自分の傲慢さ、そして弱さと戦っているように私には思えた。

店内は、沈黙に加えて、野次やら、歌声が、程よく交錯し、掛け合いのファドの歌声があちこち飛び交い、3時を回っても、宴は終わりそうもない。かつてファドの店はこんなだったのじゃないかと思うと、鳥肌がたつのがわかった。私は、泣いていた。リスボンでもめったにお目にかかれないファドの店が今、目の前に姿を現した。借り物のファドを歌うしかないヒデオよ。よく憶えておき、ここに、ファドは生きている。誰よりも、圭ちゃんに見せてあげたいと思った。残念ながら、その後、行った数軒のファドのお店では出会えなかった光景だった。

例えば、同じアルファマにある「タベルナ・エンブサード」は、最悪だった。造りは荘厳な石造り、1775年リスボン大地震にも崩れなかったという。うやうやしく運ばれてくる料理。竹笛を吹くラオン・キャオン達と来日した時、大阪のスペイン料理屋にアントニオ・シャイニョと共に招待したギタリスト、パキートが出演しているというので、15年来の親友フェルナンダに連れて行ってもらった。出演者は、電話で問い合わせたのと大違い、まず、そのオーナーの10歳位の娘が、Tシャツ姿で歌い、一人の年配の素人の老人が歌い、私が歌わされ、オーナーの歌でお終いだ。フェルナンダの奢りだったので金額はわからないが、メニューの値段からすると安くはない。それからすると、ファドの内容がお粗末過ぎる。料理も塩辛くて食べられたものじゃない。さすがの圭ちゃんも、意思表示として、しっかり残した。店を出るや否や、「ヒデオどう思う？遠慮しないで言ってごらん。」というので、私はこう答えた。「確かに店構えはご立派だけど、料理がまずい、おまけに高い。歌も演奏もおざなり、だから、客がこない。客がこないから、盛り上がらない、いい歌手はこない、ギターも乗らない、だから客がこない。悪循環の典型的な結果だね。」フェルナンダは、こう締めくくった。「昨日は、日本人の観光客でにぎわったと言っていたから、旅行業者と結託した日本人観光客向けの店ということよ。まずくて高い料理を食わされて、下手なファドを聞かされても、店構えにごまかされて、文句も言わないで帰ってゆくんだわ。」私は付け加えた。「おまけに日本人が歌う」フェルナンダは言った。「ヒデオの歌は別よ。あなたは、ギヤラをもらうべきだったわ。」

フェルナンダが連れて行ってくれたファドの店で私の気に入りの「ヌーメロ・ウン」という店があった。ファドライブは週末しかなかったが、あの私の大好きなギタリスト、ジョアン・ヴェイガがあの大声で店の雰囲気盛り上げ、若手のパウロ・パレイラが、ポルトガルギターの腕をめきめき上げていった店だ。歌手は、何人かCDで聞いたことのある人もいたが、ほとんど無名の人だった。けれど、しっかり、心を打つファドを歌っていた。ファドが育つには、ファディスタとギタリストと聴衆が三位一体にならなければならない。それが、今回の旅で得た結論である。事情は知らないが、今は閉めているという。ジョアン・ヴェイガは、新たに、ファドの店を作ろうとしているとのことだった。

“さよなら、レジデンシアル・ノヴァ・シルヴァ”

「レジデンシアル・ノヴァ・シルヴァ」一常宿にしているこの安宿が改装の為、私たちが出たら直ちに閉めるという。宿泊客は私たち4人だけだった。10年来のよしみで、わざわざ閉館を遅らせてくれたらしい。というより支配人のアブドゥーラ氏の私情を挟んでの結論だったと言ったほうが当たっているかもしれない。

同行諸氏が、てんでにリスボンを離れポルトガルを旅している間、私は一人そこに泊まっていた。インドのゴア出身という彼は、この時とばかり、「カレーを作ったから一緒に食べないか」とか、「あとで夜一緒にワインを飲もう」とか、「ほく、マッサージとても上手。よくここに泊まっていたダンサーが帰るといつも、マッサージしてあげた。ヒデオにもしてあげたい。」とかモーションをかけてきた。カレーに目のない私は、計3度、ご馳走になったが、あとのお誘いは一切受け付けなかった。業を煮やした彼は、ある日、とうとうこう尋ねた。「ヒデオは何故ほくと一緒に夜を過ごしてくれないの？」私が「私、恋人がいるの」と答えると、「ごめん。ほくが誤解していた。そうとは知らずに悪かった。でも、これからも友達だよ。」というから「そう、私たちいい友達ね。」と締めくくった。私の恋人はファドであることを彼は知る由もなかった。

その後、発つ前の日に同行諸氏と共に、彼特製のカレーをご馳走になって、おんぼろだけど、壁の、はがれかけたアズレージョがその建物の古さを物語っていたレジデンシアル・ノヴァ・シルヴァを後にした。リスボンでたった一つの私の隠れ家との別れと思うと、白いペンキのはげ落ちた窓も、テージュ河を見下ろすバルコニーの壊れそうな手摺も、けたたましく鳴るレセプションの呼び鈴の音さえも愛しく思えた。ギシギシ軋むベッドに横になりながら聞いた、坂道をブレーキをかけながら下りてくる路面電車のシャリシャリという音や、船の汽笛、刃物研ぎの笛の音が、懐かしく思い出される。



レジデンシアルの窓からのテージュ川の眺め



アマリア邸

cartas

●我が家の白梅も満開になり…一本だけでしかも小梅ですから、花も小さいのでかなりひっそりとさみしいのですが、毎年この梅の花を見ては、春の訪れを感じています。さきほど、お便り届きました。3月21日、芦屋でのライブ楽しみにしています。それから、先日、NHKの放送のお知らせを頂き本当にありがとうございました。どんなにうれしかったか、日常の生活の中で突然にこんな喜びがあるなんて、人生、良い事もたまにはあるものと、本当に嬉しく思いました。もちろん放送見せていただきました。いつもの変わらない素顔の月田さん、控え目で、胸に秘めた思いをうまく表せないでどこか戸惑っているような、自然体でいたい、そんな感じを受ける月田さんでした。画面の風景と月田さんの歌がとても自然にぴったりと合っているのが不思議でもあり、当然のようにも思えたり。私にとって月田さんとの出逢いはささやかですが幸せを感じる一時です。感謝と共にペンを置きます。
(神戸/H・M子)

(3年前NHK・BSで放映された「平成古寺巡礼」の再放送見てください。ありがとうございます。テレビ出演は懲り懲りと思っていたのですが、また、5月ポルトガルロケで泣かされそうです。)

●今朝は暖かい朝です。霧が出ていました。風邪はひかれておられません。岸和田自泉会館のライブに行かせていただきました。“感動しました。”心に感動の波が押し寄せてきて、なんと表現したらよいのでしょうか。昨年11月のサンケイホールにゆくことができなかったのも、前回の会報を見て悔しく思っていました。その分、期待する所がありました。初めての場所なのに、何か懐かしいような小さな教会のような造りのホール、木のぬくもりと石造りの落ち着いた雰囲気、静かに聞き入る紳士淑女の聴衆、月田さんを囲むように丸く置かれた座席(これがまた、クッションのよい座り心地の良い椅子でした)、10センチほどの高さにステージがあり、客席と一体感が保たれ、すべて心地好く時間が流れ、暖かい感動が私たちに包み込みました。「暗いしけ」はアマリアの声とオーバーラップして本当に感動しました。「難船」はいつ聴いてもいいけれど、ライブで聴くと一段と心にしみみます。帰宅して、日曜日の午前中アマリアの歌を主人と聴きました。ポルトガル帰りに良いお土産をいただきました。ありがとうございます。もう何度かステージを見させていただいてますが、お便りをするのは初めてです。どうしてもこの感動を、伝えたかったのです。また行こうねと夫婦で話し合いました。頑張っているステージをこれからも私たちにを見せてください。次にお会いする時まで…。
(橋本/K・A内)

(ポルトガルから帰って間もなしの土産がわりのライブ、気に入ってくれてありがとう。夫婦仲のよい様子、ウラヤマシイ!)

●北海道での長いハードなスケジュールを力一杯こなして頂き本当にありがとうございました。どこかで一日、休養があるとなお、良かったのですが、いろいろ事情があって大変な行程となってしまいました。お疲れ様でした。函館以外の状況はまだ詳しく聞いていませんが、いずれも相当に盛り上がった由。千田マネージャーも心底ホッとしているようです。私はと云えば、函館から帰った翌日、带状ほうしんが右頭部に出て、おでこ一ひでこではありません(ハハハ…)の真ん中近くまで進出。目が腫れて痛く、一時は「男版お岩」の形相になり、大いに慌てました。しかし、早期にウイルス抑制をし

たのが良く、昨日、医師から「峠を越えた」との判定をもらいました。おまけに飲酒許可も!!でも、「早乙女主水介」よろしく、額にむこう傷が残るかもしれません。これもまた、少々の凄み?が出てよろしいか、と…。秋公演に向け、いろいろと話があるようです。一両日中にマネージャーと協議する事にしています。再会を楽しみにしています。ファドの良さにも、改めて惚れ直しました。

(北海道ファンクラブ会長 酒井誠一郎)

(北海道の地にも人にも、改めて惚れ直しました。ありがとうございました。ファド、もしくは月田の毒氣に当たったのでは?ご自愛ください、主水之介殿。)

●北海道公演ツアーお疲れ様でした。「こんなにたくさんの人に聴いてもらえる場を作ってくれてありがとう」と言われて、私も元気が出ました。2000年は癒しの時代ですから、これから、もっと多くの人達が秀子さんの歌と心からの声に共鳴してゆく事と信じています。何も言わず、お互い理解する努力もなしに自分だけを後生大事にして去ってゆくなんてことはしたくないと思っています。私は本当の心を相手にぶつけて、お互いの理解の中で、それぞれが光ってゆくような人間関係にあこがれます。お互いを大切なかけがえのない人間と思ひ、よい関係を保てればと切に思います。人の心は、風に吹かれる枝のように揺れてるのです。勝手にしやがれ、と思う事もあります。ひとりひとりが本当の心で向かってくれる事は嬉しい事です。それは一人から始まるのです。自信を持って北海道のマネージャー(妹思いの姉とよく間違われますが、まあ、そんなところ…)として、秋の公演に向けて頑張ります。旭川にもファンクラブができました。くれぐれも心の健康と、身体の健康を保って、歌の道を模索してってください。本当に今回の公演のひとつひとつ、素晴らしかったです。(北海道ファンクラブマネージャー 千田尚子)
(北の大地のような大きな心で、みんなを、私をひっぱたい、じゃない、ひっぱって行ってね、姉御。)

●1月6日昼、月田さんご一行さんとCDショップAmaliaで待ち合わせ、店主のManuel Simoesにサンタ・ジュスタ協のカフェでビーカやパスティス・デ・ナタをごちそうになりました。その後、我々はオノボリさんのように月田さんに付いていきながら、28番のチンチン電車でアルファマへ向かいました。アルファマからサン・ジョルジュ城を見た後、昼食。午後は、ポルトガル・ギターとファドの家」という博物館を見学。

その夜は、私と月田さんは、ルイ・ヴェローゾ主催のパーティ会場である「ジョアン・ダ・ブラザ」へいき、マルガリーダ・ベッサ、カルロス・ゼル、ジョゼ・ダ・カマラなど超一流のファドを深夜3時まで楽しみました。月田さんは、超一流のファディスタに混じって唄わなければならないと知って、こんなことなら来なきゃ良かったとびびりましたが、さすがに月田さん、本番では実にテンションをぐっと押さえた日本ではあまり聴けないほどの凄みで、持ち分の3曲をみごとにこなして大好評でした。

このパーティは、私にとっては非常に貴重な体験でも、もう2度と味わうことはできないでしょう。感動しっぱなしで、持っていったビデオもデジカメも使うのはいかにも無粋な気がしたので、とうとう何の記録もとらずに終わってしまいました。
(東京/Y.I)

(本当に残しておきたかった光景。でも、心にしっかりと残っているよ。ずーとね。)

月田秀子の旅日記
—北海道春待ちツアー—

3月15日に大阪を立ち、まだ春遠い函館、伊達紋別、室蘭、洞爺と
南北北海道を回ってきた。体制を整えた北海道ファンクラブ面々がそ
れぞれに奔走してくれたおかげで、どこも雪をも溶かすほどの熱さが
みなぎっていた。

函館では、5時間をかけて帯広からかけつけてくれた五木文庫の
9人組、札幌からも、ファンクラブ会長の酒井氏をはじめ、懐かしい顔
が待ち受けてくれていた。夕暮れに刻々と表情を変える津軽海峡の
海を見ながら心はサウダデーに満ちてゆく。「わけわかんないけど、
いいなー」と言いながら、金屏風をバックにしたステージまで、ワインを
持ってきてくれた某氏。負けじと、会場になった若松旅館の女将も、
しずしずと一献。

翌日、函館本線で伊達へ向かう。伊達紋別の駅には、大地に生き
るおっかさんのような三原さんが迎えてくれた。大阪を出掛けに、たま
たま室蘭出身の友人から電話が入り、「伊達ですって?お客入ん
のかな」という心配気な声が帰ってきたのを思い出した。「いやいや
千田さんの『愛の鞭』でひっぱたかれて今日まできました。」三原さん
の開口一番の言葉だった。会場を提供してくださった伊達信金の
楽木氏の、開演前から、初めて聴くファドとの出会いの期待と不安で
心が高ぶるのを禁じ得ないとの一言に心のひき締まる思いひとしお。
会場では、札幌から、舞台設営の為に高橋氏が駆け付けてくれて
いた。私の舞台美術の模型の写真を何点か見せてくれた。棧橋、
月をモチーフにしたもので、それだけでさまざまなストーリーが生まれ
そうだった。「いつか、実現したいね。」まず予算面のクリアが先決だ。
会場は立ち見が出るほどの盛況だった。「ありがとう!ご苦労様!」
打ち上げで抱き締めた三原女史の目は涙で潤んでいた。洞爺湖温
泉泊まり。夜中1回、朝風呂2回、3度の入浴で心身共にリフレッシュ。

翌17日は、バスで室蘭入り。札幌から道新事業部の田中氏が駆け

付けてくれていた。千田、村上女史の熱意と北海道新聞の側面か
らの協力があったからこそ実現した北海道公演である。残念ながら、内
地にはその連携がない。ないことを嘆くより、出合いに感謝しよう。そ
の日の朝刊にも載せてくれたおかげで、会場は、椅子を追加するやら
で大慌て。

さて最終日、会場となる洞爺村から迎えに来てくださった上野さん
の車で、煙の上がる焼けただれた岩肌が生々しい昭和新山を見物。
一晩のうちに畑が盛り上がりできた山。前日畑で使っていた鍬が山
のてっぺんに見えたという。雪を頂いた山々を湖面に写す洞爺湖を
横目にひたすら車は走る。今日のお客は、キタキツネはたまた熊か、と
不安がよぎる。一風変わった球形のログハウスに目を奪われているう
ちに、千田女史の『愛の鞭』にうたれた第二の犠牲者鈴木さんのロ
グハウスに到着。湧き水でたてたコーヒーをいただきますながら、まだ春
遠い洞爺湖を眺める。灰色のコンクリートジャングルに囲まれ生活す
る私は、すでに他人だった。それとともに厳しい自然と共に生きる人
の遅しさを思った。部屋には私のファドが流れていたけど、ユバンキ
の歌が聴きたくなった。あの太くて大地を思わせる歌声が。箏笛の
音が雪景色の向こうから聞こえてくるようだった。

会場は、手づくりのぬくもりであふれていた。降り始めた雪の中を黙々
と会場に向かう人達の姿を、控え室の内窓の隙間から見た。「こん
な処まで歌いに来てくださって…」という上野さんに、「こんな素晴らしい
処で歌う機会を与えてくれてありがとう。」絡み合わされたアケビ
の蔓でできたランプが愛しくて、一曲『置き去り』をその灯だけで歌わ
せてもらった。打ち上げの卓を賑わせてくれた手作りの生チーズ、有
機栽培のホウレン草のサラダ、肉ジャガ…美味しかった。お腹も心も
一杯になって、目は涙で一杯になって、「ありがとう」を言うのが精一
杯だった。

北海道ファンクラブの面々の熱意が、北海道の大地にまいたファド
の種、どう人々の心に芽吹くのか。そして、北国に生きる人たちが潤
してくれたこの私の心に何が芽吹くのか。春よ、来い。(2000.3.21)

vamos cantar!

四月

訳詞 Caldo Verde

あなたに包まれて 私は太陽を宿し
大地を見出し 海を知る
あなたの手引きで 古代の船に乗り 遥かな地に着く
あれほど離れていたものが 今はこうして身近に

あなたは私の葡萄酒 私のバン
ギター そして果物
私はこの船に乗り探しに出た
あなたのどこに四月の故郷があるのかと

あなたを探しあぐね
歌を歌っては あなたに思いを巡らせていた
けれど四月の故郷があなたを身にまとった時
あなたは誰と尋ねたものだ

こみ上げるあなたへの愛を私は歌った
するとあなたは与えてくれた
汚れなき大地 慈愛に満ちたアルガルヴェを
私は気づいた あなたが四月の故郷であると
私は気づいた あなたこそ四月の故郷であると

ABRIL

Letra : Manuel Alegre
Musica : Alain Oulman

Habito o sol dentro de ti
Descubro a terra, aprendo o mar,
por tua mãos, naus antigas, chego ao longe
que era sempre tão longe, aqui tão perto.

Tu és meu vinho, tu és meu pão.
Guitarra e fruto. Meu navio,
este navio onde embarquei
para encontrar dentro de ti, o país de Abril

E eu procurava-te nas pontes da tristeza
cantava adivinhando-te cantava,
quando país de Abril se vestia de ti
e eu perguntava quem eras.

Meu amor por ti cantei. E tu me deste
um chão tão puro algarves de ternura.
Por ti cantei, à beira terra, à beira-povo
e achei achando-te o país de Abril
e achei achando-te o país de Abril.

informação

- アマリア・ロドリゲスの亡骸は、いまだ埋葬される墓地が決まらず、市電28番の終点「Prazeres」の墓地に眠っています。たくさんのお花が供えられていました。お花と共に、昨年末のコンサートのプログラムを置いてきました。彼女が生前住んでいたSão Bento 通りには、Rua Amália(アマリア通り)の黒い文字が至る所に見受けられ、いまは亡きアマリアを偲ぶよすがとなっていました。ベランダに赤いゼラニウムの花が咲き誇る彼女の家の一階は改装中で、史料館になるという噂を聞きました。
- ティモールへの義援金の件ですが、リスボンでその関係の機関、団体を探したのですが、信頼のできそうなところが結局見つからずで、一緒に探してくれたフェルナンダ曰く、「ヒデオ、一番いいのは、ファドの為に、自分の為に使うべきよ」。お金さえ送ればいいってもんでもないしと思ひ直し、やめることにしました。
- アマリアのサイン入りCD7枚組セットが、3倍以上のプレミアがついているのには、びっくり。アマリア主演でポルトガルの映画市場爆発的なヒットになった「黒いマント・CAPAS NEGRAS」のビデオも仕入れてきました。同じくアマリア主演の「ファド・FADO」と共に、いつか上映会ができればいいと思っています。
- 6月7日(水)から13日(火)まで、鳥取・倉吉の陶芸家河本賢治氏の個展が阪急美術画廊3で開催されます。築窯20年の記念すべき個展でもあります。
- 5月の下旬から、某テレビ局のロケでリスボンへ行ってきます。ついでに、12年ぶりにファド大祭典(6月12日前後)で、歌えたらとも思っています。6月20日位まで滞在する予定です。その為、5月のアートクラブライブは、5月15日(月)に繰り上げ、月末の巴里野郎はお休み、6月の三裕の館でのライブもお休みになります。放送日時等は後日お知らせします。

<月田秀子のスケジュール>

4月 5日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
24日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
27日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
5月 3日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
5日(金)	東京・渋谷大山町「第5回倶楽部ポルトガルの集い」 *ファド倶楽部会員のみ特別参加をご承諾いただきました。	*問合せ : 03-5311-6836(小峰)
11日(木)	大阪・石橋「かしの木」	*予約・問合せ : 0727-61-8005
13日(土)	神戸・灘「SATOMU 里夢」	*予約・問合せ : 078-821-2140
15日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
19日(金)	長崎「市民会館文化ホール 一スミセイライブミュージアム」 出演 : 五木寛之・辻香緒里・上原まり	*問合せ : 06-6311-0618
6月 26日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
29日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
7月 1日(土)	東京・銀座「アルテリーベ」	*予約・問合せ : 045-713-6277(斉藤)
2日(日)	神奈川・藤沢「さくらんぼの会」	*問合せ : 0466-24-2229
9日(日)	大阪・堂山町「バナナホール」 —きまぐれライブVol.5—	*予約・問合せ : 06-6345-5065 (サンケイ企画)

<編集後記>

5枚目のCDの歌詞カードを作成中、発音、歌詞の誤りに愕然とする。今更どうにもならない。気付いたら、直してゆくしかない。恥ずかしいやら、情けないやら。師なきゆえの定めと、ご容赦のほど。自然も、人も新旧交代の季節、定年退職した会員も増えてゆく。第二の人生のお供に月田をお忘れなく。人生の道連れに、ファドを選んだ月田です。亭主はなくとも、ファンの方々と共白髪。今号は最近とみに白髪が増え、甘いフェイスに洗みの加わった馬ちゃんのエピソード帖はお休みです。会報の原稿を書き始めたのは冬、いつのまにか春。季節に追いつけられた感ひとしお。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.asahi-net.or.jp/~wc3k-smz/FADO/menu.html>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第26号
- 2000年4月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808